

米沢彦八とそろま

林 泰 弘

一、はじめに

義大夫節以前の古流人形浄瑠璃において、間狂言として上演された道化人形のそろまは、近世中期にかけて衰退していった。

「竹豊故事」（宝暦六年刊）下巻「操人形之故事」*名人之遣手^付古今達人之事」には、

此野呂松氏を祖とし、京大坂の操芝居^ニ野呂間・鹿呂間・鹿呂七・麦間等と名を付、道外たる詞をなし、浄るり段物の間の狂言をなしたり。近來ハケ様成事ハ捨り、知れる人も稀^ニ成し也。

とあり^ニ、すでに宝暦頃にこういった操り人形の間狂言が衰退していたことが知られる。

しかし、「竹豊故事」の刊行されたまさにその宝暦六年が、それまで長らく廃っていたそろまにとって重要な年と

なっているのである。現存最古のそろま狂言本は「登り舟」「北野八景」「地^ニくめぐり」「祭り八景」「料理献立」であるが、宝暦六年春に京都で刊行されているし、本居宣長が「在京日記」において「そろま物まね」を見た^と記しているのも宝暦六年の条である。

宝暦六年以前にそろまが復活上演されたという記録は見当たらない。そろまは、宝暦六年になって突然復活したものと映るのである。一体この復活現象はどのような理由によるものなのであろうか。

資料が少ないため決定的なことは言えないが、これを当時京都で人気のあつた芸人・米沢彦八との関連で考察し、さらにそろまと上方落語の関係について触れてみたい。

二、米沢彦八と彦六

肥田皓三氏が紹介された^ニように、京都に遊学中の本

居宣長は、現在の落語家の祖先である米沢彦八の芸をたびたび見ている。

知恩院の御影堂にまいり、けふは大人の忌日なれば、回向しおがみ奉りて、南のかたの門を出て、祇園林をすぎ、二間茶屋に入て、物くひなどす。いとう人多く来り集りて、にぎはしきさまなり。社内に米沢彦八居侍りて、人多く集れり。しばし入て聞侍る。此彦八といふものは、都に名高きものになん有ける。いとおかしくはなし物まねなどし侍りて、人の耳を悦ばしける。

〔在京日記〕 宝暦六年正月二十四日条

盆まへ近く成て、いづこもくいとさはがし。此比四条河原に、後ずどかやいひて、米沢彦八が出侍りていとにぎはしく見ゆ。かれこれ役者うき世物まね、又五ツ六ツばかり成いときなき童の、江戸万歳かるわざやうのことし侍りて、人多くより侍る。そこら床几おほく、茶見せ出して、かはらいとにぎはしきこと也。

〔同・宝暦六年七月七日条〕

四条下る所の河原に、米沢彦八が出居侍る。いとにぎはし。

〔同・宝暦七年七月二十九日〕

ここに名前の挙げられている米沢彦八は二代目である。

元禄期の初代米沢彦八は大坂で活躍したが、「翁草」巻

百二十六回に、

享保七年の頃より米沢彦八と云へるもの、所々法会等の場に出て、あられぬ謔言を云て人を笑せ、都の名題と成て久しく有しが、明和の頃にや死て、其弟子儀八郎外に店を構へ、軍書読と成る。文四郎、勝五郎などが彦八を嗣て祇園に常店を出し、此者共も今は皆死して其店は残りながら、今の者どもの咄は遙に劣れりとあるように、二代目以降の名跡は京都に移つたことが知られている。

京都の米沢彦八の活動は、二代目が元文年間三冊の軽口本を三年連続で板行したほかには資料が少ない。この宣長の記述は、分量がわずかであっても、上方落語研究史上、貴重なるものである。

ところで、「在京日記」には、同じ宝暦六年に次のような記事がある。

村田氏よりまねかれて、かの木屋町の座敷にまかりぬ。嘉太夫浄瑠璃、豊松大和が弟子に、縫殿といふ上手あり。これがまいりてかたりける。安倍安名が小袖物ぐるひの段をきき侍る。大方嘉太夫ふしは、今の世にはさのみもてはやさず。女童の耳どをきやうなれど、義太夫よりは、又一きは味はひありて、おもしろきかたある物也。其跡にて、彦六といへる物の、上り船そるま物まねしける。是は、近きころはやり侍りて、度々きし事なれど、おかしき事多くて、あかず興あ

る物也。

(宝暦六年六月十日条・傍線は引用者による)

傍線部の「彦六」は筑摩書房版「本居宣長全集」によるものだが、従来、前述の二代目米沢彦八のことを指すものと考えられることが多かった。前掲肥田氏論文や、宮尾興男「上方舌耕文芸の研究」⁵⁵でも「彦八」として紹介されている。いったい、この「彦六」は米沢彦八のことなのかであろうか。

本稿執筆に当たって、残念ながら「在京日記」の原本に触れる機会を持たなかった。「彦六」が誤植・誤刻である可能性もあるわけだが、「彦六といへる物」という書き方からは、この芸人の名前が宣長にとつては初めて聞くものであったことを読みとるべきであるように思われる。既に名前を出ている米沢彦八より、他の箇所にも名前の見えない「彦六」の方がこの箇所においてはつじつまが合うだろう。また、「彦六」が座敷に呼ばれて物まねを披露している点には注意が必要である。

宣長が記す米沢彦八の芸は、すべて大道において演じられている。「太平楽府」「茄子腐稿」といった狂詩集に残された、二代目彦八を追悼する狂詩も、すべて彦八の大道芸の様子を描写していて、座敷芸を描写したものは存在しない。

暉峻康隆「落語の年輪」⁵⁶によると、大道芸人は、乞胸

といって、身分は町人でありながらも賤民同様と見なされたのに対し、

文化三年以前は、大道芸人はもとより、寺社や明地の寄場に出演する講釈師などまで、乞食と同類とみられていた。乞胸は、その頭の山本仁太夫、もしくは非人頭の子善七の配下とされていたのであるから、当時から江戸落語中興の祖とされていた烏亭焉馬とその社中(咄の会)の面々が、趣味で作った小咄を発表はしても、公開実演に手を出さなかったのは当然である。また寄席咄の元祖・三笑亭可楽に先立って、実演を手がけた初代石井宗叔や桜川慈悲成が、座敷咄に終始した理由もまたそこにあつたと考えられる。

(「落語の年輪」百六十一頁)

とあるように、座敷芸人は乞胸頭の管轄を離れた町人でありえた。大道と座敷という芸態の違いは、身分制の厳しい江戸時代において、現在われわれが想像する以上に大きな意味合いを持っていたのである。

落咄ではないが、講釈についても、「只誠埃録」⁵⁷巻二百二に、

亦享保の頃神田伯竜子といへる者専ら大名旗本衆へ招かれ軍書講談を説で大に行はれたり。見識有者にて町家へ出ず。

という記述があつて、武家向けに座敷で講釈を行う者が、

町家向けの講釈のように大道で芸を行うことは不見識であると思われ、見なされたことがわかる。大道芸を専らとした芸人が座敷に出ることがなかったとは断言できないが、両者の芸能の間に格において厳然と差があったことは確かである。もつとも、暉峻氏や「只誠埃録」は江戸について説いたものであるのだが、格式を重んじる京都においても事情に大きな違いはなかったものと思われる。

さらに、宣長は他の箇所において、「社内に米沢彦八居侍りて」「四条下る所の河原に、米沢彦八が起居侍る」のように、米沢彦八を常にフルネームで記している。周知の人物であったはずの米沢彦八については、「といへる物」などと書く必要もなかった。屋号を記さず、「彦六といへる物」とだけある六月十日条は、明らかにこれらとは違っている。

以上のような点から考えて、やはり本居宣長全集の「彦六」は、彦八とは別人と見るべきであろう。ただでさえ数少ない二代目米沢彦八に関する記事が一つ減るのは残念であるが、少なくともこの宝暦六年六月十日条は、他の米沢彦八に関する記事と相違点が多く、同列に論ずるわけにはいかない。「のろまそろま狂言集成」⁵⁰所収の、信多純一「道化人形の系譜」では、この箇所を「彦六」として引用し、彦六の前に演じた嘉太夫節の芸人との関連を考察して、彦六はあるいは暫間であったかもしれないとしているが、

この方が適当であると思われる。

では、「役者うき世物まね」を行った米沢彦八は「そるま物まね」とは無関係であるのだろうか。

三、米沢彦八はそるま物まねを演じたか

禿氏祐祥編「絵本上袋集」⁵¹によると、彦八没後の明和年間に「米沢彦八極楽遊」と題する作品が板行されている。いま原本の所在が不明で内容を確認できないが、上袋の影印では、書名の他に「都の名取は地獄の噂」とあり、鬼の他に、彦八とおぼしき鼓を持った男と、冥官あるいは閻魔王と思われる人物の三者が描かれていることが確認できる。

「都の名取は地獄の噂」とは、米沢彦八が地獄に関する咄をネタとして持っていたことを示すものである。宝暦年間には、地獄を扱った滑稽文学が流行していたらしく、「不埒物語」（宝暦五年・滑稽本）、「地獄楽日記」（宝暦五年・滑稽本）、「根南志具佐」（宝暦十二年・談義本）、「地獄噂鬼の田分言」（宝暦年間・黒本）などが出ている。彦八が口演した地獄の咄自体は、これらから刺激を受けた可能性もあるだろう。しかしこれらはみな地獄内部の騒動記であって、「極楽遊」と題する作品に共通するような内容のものではない。絵本「米沢彦八極楽遊」が、鬼が彦八を連

れて地獄・極楽への珍道中を繰り広げる筋立てであるとすれば、冥界にやってきたそろまを鬼が極楽まで連れてゆくそろま「地ごくめぐり」との関連を当然認めてよいだろう。

なお、「地ごくめぐり」に関しては、前掲「のろまそろま狂言集成」の解題において、能狂言「八尾」によつたものとされている。彦八の本芸であつた落咄は、仮名草子時代の初期断本から狂言に取材しているものが多くみられ、関係が深い。「米沢彦八極楽遊」が拠つたものが狂言とそろまのいずれであるか多少の考察の必要があるだろう。

両者とも、六道の辻に差し掛かつた死者を、鬼が地獄へ伴おうとするものの、極楽へ向かうことの出来る証拠（「八尾」では八尾の地蔵の文、「地ごくめぐり」では善光寺の御印文）を持つており、鬼が極楽へ連れてゆく、とする筋立ては共通している。

「八尾」^(二〇)においては、死者（アド）の登場に際して、是は河内国八尾の里の者で御座る。我思はずも無常の風に誘れ、唯今冥土へおもむきます。先そろりく／＼と参うと存る。誠に、只今なと身まからうとは存ぜんんだ。是と存た成らば後生も願はう物を、近來残念な事を致た。

のような簡潔な語りがあつて、八尾の地蔵の文を持つてゐることを語つたのち、すぐ六道の辻で鬼に出会うのであるが、「地ごくめぐり」の方は亡者が鬼に出会うまでが実に

長い。

○「めうなところへきてのけたは。こふみたところが長らくじかとおもへば、ちをんいんのさんもんもみえず。ふけたへはいつたでもなし。つちぼこりがふくでもなし。おぼろ月よでもなし。おれが身のうへは、うつとりしたやうな。もしものことはなかつたか。いましよくどつたに、みやくとつてみよ。わがでにみやくをとるときは。しん、かん、じん、はい、ひ、めいもん。ヤアく／＼なむさん、しもふた。

こふなるとしつたら、こちのところから、やんげんおいてとなり、きぐすりやおむすとそふて。立ばしやくやく、とどすりやぼたん、あるきすがたはゆりのはな。もはやひねたにはとりの、ごもくさがすやうなあしもとであるかれたにようか。うらにほれて、玉づさをおくす。此ほうからはやる。玉づさをよみならべた所が、そこもとさまへほれ申事実正めいはくなり。万一此ことさうゐごさ候はゞ、しゆくらうめしつれ、諸だうぐともに此方へひき取べし、ほれ状くだんのごとし。あて名は、こつてりさままいる、ねりみそより、などといふやうな、したたるい状を此ほうからやるに、なながむすめ、まこと／＼おもひ、あのほうからおおくす。こつちからもやり、やつたりとつたり、とつたりやつたり、ふみのとりやりばつかりで、ついに一夜の

まくらもかはさず。

(○はそろま、△はそろま以外の人物の台詞を表す。

引用は「のろまそろま狂言集成」によるが、引用に当たって濁点を付した。以下、そろま狂言の引用はこれに従う)

これは自分が死んだことを確認してから惚氣を言っている場面であるが、以下、道脇の田の出来具合を眺めながら六道の辻へと歩き出す。その途中、

○「むかふの方みれば、くろじゆすのきせるづゝがおちてある。これをこへて行ではない。ドレ、ひらいませふ。なむさん、かまぼこのいたがひつくりかへつてある。

のようなクスグリがいくつか挟まれて、鬼の登場となるのはようやくそのあとである。

極楽へ向かう途中についても、「八尾」では、鬼が死者をどうしても地獄へ送ろうとするが、「地ごくめぐり」では善光寺の印文を見せられた鬼は、

△「ハ、あ、これさへあれば、ゑんま王へ申上ずと、すぐにごく楽へ道びきいたそふ。さあくさきへたつてござれく。

と素直に極楽行きを決める。

「八尾」の鬼は、八尾の地蔵から閻魔王に宛てた手紙を読んで、

此上は力なしとて、罪人の手を取て、焰魔王の案内じやにて、九品の浄土へ送りとゞけ、夫より地ごくに帰りしが

と、極楽送りを認めてすぐに極楽へ連れて行くのに対し、「地ごくめぐり」における極楽までの途中では、

△「なんと、花のみやこもにぎやかな事で有ふな。○「にぎやかな事でごんす。茶やさんとのはやりうたなども、うたひつくしてきれめやら、長崎から状通てとりよせたものか、おまへがかいてやらんしたか、

かくたけひげにけいつたんよきんすかんなんくはつくく

と、おまへのいわいすやうな事ども、さみせんにかけてうたふじや。

△「はて扱、何をいふやら。くるかく。○「くるますく。

のようなくすぐりが何度も繰り返され、その度ごとに「くるかく。くるますく。」のやりとりが行われる。極楽に到着しても、そろまが地獄を覗くことを望み、

○「ア、あちらこちらに、からだは牛馬でかほが人間じや。あれはなんじやへ。△「あれはしやばにて牛馬をそまつにしたものは、あのとをり。○「ア、くうれしや。ちちのおやぢはとんと仏になつていらる。△「それがしれたか。○「ちちのおやぢは仏をきつう

そまつにしたわろじや。

といった落咄が最後に置かれて浄土に入る。

それぞれの全体の分量の違いを差し引いても、極楽をほとんど描かない「八尾」と比べ、「地ごくめぐり」はむしろ地獄の存在がかすんでしまうほど、極楽までの道のりが長く、また滑稽に描写されている。このように道中の滑稽を描いた「地ごくめぐり」には、後述するが、さながら一席の落語（旅ネタ）の趣がある。「米沢彦八極楽遊」という書名が内容をそのまま表しているものだとするれば、「八尾」よりも「地ごくめぐり」との間に何らかの関連を見て取るのは自然であろう。

「米沢彦八極楽遊」のような作品は、あの世での米沢彦八の滑稽な様子が、現世からの延長であるとする趣向により、一層効果が上がるとはせずである。すなわち、現世でそのままの物まねをしていた米沢彦八が、あの世でもそろま狂言「地ごくめぐり」さながらに滑稽を生み出し続けている、ということではなければなるまい。

以上のことから、米沢彦八のレパートリーとして、そろま物まねがあつたと考えてよいだろう。

四、そろまと落咄

前章でみたように、そろまには落咄を利用している箇所

がある。

「地ごくめぐり」に限ったことではなく、「北野まいり」にも、

○「ヲ」五郎兵衛さん。あのきよいとたかいはなんじやへ。△「あれはひのみやぐら。○「ア」わしやわるふみた。△「なん」とみた。○「やりもちのせんちかとおもふた。

という箇所があるが、これは延宝七年刊「当世軽口咄揃」
二の、

とつと遠国の者、四五人づれにて花の都へのぼり、京内参りをする。北野をこゝろざして千本通りを上りしが、焼亡の時に鐘つく所を見て、あれは何を商賈にする人の家ぞ。さてくながい家じやと、いろく評判すれど、埒あかず。同行のうちにかしこだてする者いひけるは、あさましや。ミなハ初心者じや。あれをしらぬか。あれは鐘持の雪隠じやといふた。

（巻二の五・鐘持雪隠の事）

をはめ込んだものである。

現存するそろまの曲数はわずかなものであるが、その全ての笑いの箇所に関して軽口本との詳細な比較調査をしたわけではない。したがって、他にも明らかに軽口本を利用している箇所があるのかどうかは現在のところ指摘できないのだが、我々の知りうる軽口本所収の咄を利用している

か否かに関係なく、落咄と呼ぶしかないものをはめこんでいる箇所がそろまにはいくつも見られる。豊富に盛り込まれているくすぐりにも、語り口を変えることによつて容易に落咄になり得るものが多い。そろまと落咄との関係の深さがうかがわれる。

また、そろま狂言「やどがへ」は、大家であるそろまが、いろいろと商売に難癖をつけて借家を申し込む人を追い返す筋であるが、末尾には、

○「ア、こりやゆるせく、これはまためいわくな。

ひよんなしやくやにかゝつてなんぎする。コレガほんの小家のやみじや

とある。これは単なる駄洒落ではなく、当時流行していた口合(三)を取り入れたものと思われる。

さらに、そろま狂言「けいこそろへ」や、成立の時期が宝暦より下ると見られているそろま狂言「東都八景」(天明元年の奥書を有する)には、当時の芸人を描写した箇所がある。「けいこそろへ」の該当箇所は、

○「ソレ北野ゝ入口にゐるゝはらゑいち殿でゑす。

そのこはねがこのとおり。

寄附「さてこんばん申まするは、かの金むらやのおさんと金五郎と、れんぼれゝつのだんでござります。(以下略)

△「そんならよしをか九八をせふわいの。

「さてばい／＼／＼とはなします。まづはなしと申すものは、おさむらいさまがたにむきますはなしと、御しゆつけ様がたにむきます咄と、べちにむくのむかぬのといふて、はなしにかはゝござりませぬ。

となつてゐる。

ここでの「はらゑいち(栄治)」は世話講釈のようなものを讀んでいるが、おそらく「本朝世事談綺」巻五(三)(享保十九年刊)に、

年来浅草御門傍に出て、太平記を講ず。此ものは理尽抄と云太平記の評判の書を以て講尺せり。又その頃赤松清龍軒といふ者、堺町に芝居をかまへ、原昌元と名乗て軍談を講ず。京都にては原永楊と云者世に鳴。

と記す原氏と関係がある講釈師であろう。ちなみに、「東都八景」には、当時有名な講釈師・滋野瑞龍軒が登場する。

「よしをか九八」については不詳であるが、「咄」を自称している点と、「むくのむかぬのといふて、はなしにかはゝござりませぬ」というところから見て、軽口咄を演じる芸人であつたのだろう。

このような物まねは、そろまを真似たという「彦六」や米沢彦八の浮世物まねと変わるところがない。そろまが声色・役者物まねなどによつて演じられたことは、前述の「道化人形の系譜」においてすでに指摘されているが、講釈師

・咄家の物まねを行っていることは、そういった芸能との関連を思わせる。

以上のように、そろまは他の文芸や芸能を積極的に取り入れているところがある。廃れて新たな創造力を失っていたと思われるそろまが、これだけ当時の流行を盛り込んだ内容で急遽復活してきたことの理由は、こういった他ジャンルとの関連からも考えてみるべきだろう。

「在京日記」宝暦六年六月十日条の「そろま物まね」の記事が、宝暦六年の突然のそろま狂言本刊行と軌を一にしていること、米沢彦八がそろま物まねを行ったと思われること、その彦八は、死後になって追悼の狂詩や「米沢彦八極楽遊」が出されるほどの人気者であったこと、宝暦以前のそろま興行記事が絶えてみられないこと、そろまが多くの落咄等を取り入れていること、以上のような点から考えて、何らかの機会にそろまに触れた米沢彦八をはじめとする芸人がそろまをまね、次いでそろまの人氣が一時的に高まった、というのが実情ではないだろうか。

こう考えると「道化人形の系譜」に、

京の地で宝暦頃、「そろま」狂言の復活が見られたことは事実である。一楽子が京のこの動きを知らなかったのは不思議であるが、それだけにこの復活が宝暦年間にいつから急に見られた現象であり、且つ京の地の一部においてであったことを物語るものではないか

ろうか。

とあるような、一楽子がそろま復活を知らなかったことの説明もつくと思われる。

五、上方落語の旅ネタとそろま

前述のように、そろまが落咄から影響を受けていることは確かであるが、逆に落咄に影響を与えたであろう側面も見逃すことは出来ない。

そろま狂言本を読めば、それらがあまりにも現行の上方落語に似ていることに気づく。

惚気や独り合点、駄洒落の連続や糞尿譚など、笑いの性質が似ているだけでなく、「登り舟」「地ごくめぐり」「大津もどり」「北野まいり」のような、そろまが道中でいろいろ滑稽を演じてみせる作品などは、明らかに上方落語の旅ネタの成立と関係があるものと思われる。

上方落語では、旅ネタを入れ込み咄と称し、前座の口さばきとして学ばせることになっている。

旅にもいろいろとございます。東の旅というのは伊勢参りのおうわさで、「伊勢参宮神乃脈いせまんぐうかみのにまわい」と申します。

西の旅は「兵庫渡海鱈魁入れひょうごのたかいまがのめい」、北の旅は「池田の猪買ししかい」、南の旅は「紀州飛脚」、天に昇りますのは

「月宮殿星都げつみやうてんはしのまこと」、海の底へ行きますのは「竜宮界

竜都」、異国へ参りますのは「島巡り大人之尻」、

あの世に行きますのは「地獄八景亡者戯」と、いろ

んな旅がしこんではございますが

（「米朝落語全集」二巻六「伊勢参宮神乃販」）

というように、いろいろな種類の旅ネタが存在している。

右の東の旅「伊勢参宮神乃販」のみは一席の落語の題名ではなく、「七度狐」「こぶ弁慶」「軽業」「三十石夢の通り路」など、独立して演じることも可能な多くの咄から成る、長講続き物の総称である。旅ネタがこれほど豊富な分量となっているのは、江戸落語にはみられない上方落語の特徴である。

このうち、「三十石夢の通り路」については、舟に乗る前の物売りの描写、船中での国元・商売の尋ね合い、何度もうるさく船頭に話しかける男の存在など、そろま狂言「登り舟」に細部まで類似している。前掲の「在京日記」の彦六は、「上り船そろま物まね」を演じていた。おそらく米沢彦八も「登り舟」を演じていたのではないだろうか。「三十石夢の通り路」は、明治初年ごろ、初代桂文枝の名人芸と質入れのエピソードで有名になったネタであるが、「上り船そろま物まね」を元にして宝暦頃にすでに落語としての原形が出来上がっていたものかもしれない。

前述のように、彦八は「地ごくめぐり」をも演じていたと見られるが、これもおそらく「地獄八景亡者戯」の原形

となったものと思われる。

このように考えると、米沢彦八は上方落語の旅ネタの元祖と称すべき存在ということになる。

彦八自身の演じていた落咄は、軽口本を通じてみる限りごく短く、長大な長講旅ネタに発展するようなものではない。実際に口演されていた咄の長さがどのようなものであったか推し量るに足るだけの資料も皆無であるが、上方落語における旅ネタの発展は、そろま物まねと密接な関係があるのであろう。少なくとも、そろまが無ければ、現在の旅ネタのうちのいくつかは存在しなかったのではないかと思われる。

もしかしたら、旅ネタにはめものが非常に多く用いられるのも、音曲とは切っても切り離せないそろまの物まねから起こったものであるのかも知れない。

六、結び

以上、そろまと米沢彦八・上方落語との関係を考察した。

そろまについても米沢彦八についても、それぞれ現存する資料が乏しいが、今では顧みられる事のないそろまが、二代目米沢彦八を介して上方落語の旅ネタの形成に大きく関与していることは、そろまと上方落語の両者についての研究の上で、広がりを持たせることになるであろう。

〔注〕

(一) 引用は「日本庶民文化資料集成」七(三一書房、昭和五十年)による。

(二) 「寄席」(「日本の古典芸能」九、平凡社、昭和四十六年)所収、「大阪落語」。

(三) 引用は「本居宣長全集」十六(筑摩書房、昭和四十九年)による。

(四) 引用は「日本随筆大成・第三期」二十二(吉川弘文館、昭和五十三年)による。

(五) 笠間書院、平成四年。

(六) 講談社、昭和五十三年。

(七) 「せきね文庫選集」(教育出版センター、昭和五十八年)所収の影印による。

(八) 大学堂書店、昭和四十九年。

(九) 仏教芸術院、大正十一年。

(一〇) 引用は岩波文庫「大蔵虎寛本・能狂言」中(岩波書店、昭和二十八年)による。

(一一) 引用は「嘶本大系」五(東京堂出版、昭和五十年)による。

(一二) 鈴木棠三「ことは遊び辞典」(東京堂出版、昭和三十五年)所収「解説・しやれ」によると、江戸時代のシヤ

レには、上方で行われた口合と江戸で行われた地口があり、口合は母音が相通するものが多いという。この箇所の「小家」と「子故」は、ほぼ母音が相通していると認めてよ

らう。

(一三) 引用は「日本随筆大成・第二期」十二(吉川弘文館、昭和四十九年)による。

(一四) 創元社、昭和五十七年。

(はやし やすひろ・博士後期課程)